島根県立大学出雲キャンパス
紀要　第15巻，25-33，2019

認知症高齢者に対する「聞き書き」による看護学生の実習での学び

荒木さおり[1]，伊藤　智子[1]，加藤さゆり[1]，林　健司[1]，
濵村　由香[2]，梶谷みゆき[1]

概　要

本研究の目的は，学生が実施している認知症高齢者への「聞き書き」の学びを明らかにすることである。A大学老年看護学実習において学生が行った認知症高齢者に対する「聞き書き」のリフレクションレポートを質的帰納的に分析した。その結果，【語り手の個人史や価値観の理解が深まる】【聞き書きは個別性のあるケアを創り出す】【語り手の豊かな感情を呼び起こす】【語ることで人生を振りかえり，過去の記憶や思い出に親しむ】【語りを引き出すための事前準備の重要性】【語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿勢の重要性】【記憶の想起を助ける工夫の重要性】【聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる】の8つのカテゴリが抽出された。学生は「聞き書き」を通して，認知症高齢者がもつコミュニケーション障害を考え，学生自らが相手に応じて瞬時に状況判断を行って工夫し，認知症高齢者との関係づくりに取り組めていたと考える。また学生は，「聞き書き」を通して，認知症高齢者に対する態度形成とQOLを高めるケア提供の機会を得ていたと考える。これらのことから，「聞き書き」は，学生が認知症高齢者との対話を通して，老年看護学教育において重要な認知症高齢者の理解が深まる機会になることが示唆された。教員は，今後も学生個々が「聞き書き」という相互行為を通して体験した内容，感情，思考などを言語化したものから，学生が認知症高齢者理解を深めていく過程を確認していくことが重要である。

キーワード：認知症高齢者，聞き書き，看護学生，学び

Ⅰ．はじめに

近年，医療制度改革や地域包括ケアシステムの構築が各地ですすめられている。そのような状況のなかで，看護基礎教育の老年看護学教育に求められるのは，いずれの場（病院・高齢者施設・家庭）にあっても，高齢者の尊厳を守り，希望を見いだし，残される能力に働きかけ，できるだけQOLを維持するケアの実践能力である[1)]。また，平成20年度の看護教育カリキュラム改正では，「老年看護学」において生活機能の観点からアセスメントした看護を重要視することが強調されている。さらに，近年パーソンセンタードケアの考え方や目標志向型思考[2)]の考え方が浸透し，認知機能が低下し意思疎通が困難になった認知症高齢者に対し，本人の意思や生活史を大切に，潜在している生活機能を探し出し，そこに働きかける看護が注目されている。

看護学生の高齢者理解を促進する取り組み

[1]島根県立大学
[2]元島根県立大学

でも，回想法，ライフレビュー，ライフレビュー・インタビュー[3]による学習は，直接，高齢者に接することによって，高齢者への興味・態度・思いに関する情意領域の学習効果が高まるなど，高齢者理解が一層深まると考えられている[4]。さらに，インタビューによる学習は，学生のみならず，高齢者にとっても利点が得られ，相互作用があると考えられる[4]。A 大学の老年看護学実習では，認知症高齢者を対象にした「聞き書き」を実施している。「聞き書き」は学生が認知症高齢者とのコミュニケーション力を高めたり，潜在している能力をアセスメントし，もてる力や強みを活かした目標志向型思考ケアを創造する学習方法として適切と考えられ，A 大学の老年看護学実習の目的を達成するためには重要である。しかし，「聞き書き」を通して，高齢者理解を促す学習により，看護学生がどのように学びを得ているのかは明らかにしていない。時代に対応した老年看護学教育を行うためには，「聞き書き」の評価を行い，効果や課題を明確にする必要があると考え，本研究を実施した。

Ⅱ．用語の定義

聞き書き：認知症者の感情の安定やコミュニケーションの促進を図ることができることが報告されている個人回想法の１つの方法である。

Ⅲ．研究目的

看護学生が実施している認知症高齢者への「聞き書き」の学びを明らかにし，実習効果を検証することである。

Ⅳ．老年看護学実習の目的と構成

A 大学の老年看護学実習は，高齢者の希望，価値観，生活史，社会との繋がり，障害・疾患などから形成されるその人らしさを，医療の場でも生活の場でも大切にした看護実践力を身につけることを目的としている。老年看護学実習は，3 年次秋学期に実施し，5 単位 225 時間あり，高齢者施設実習（2 週間）と医療施設実習（3 週間）で構成されている。認知症対応型グループホームでの１週間実習と特別養護老人ホームまたは老人保健施設での１週間実習を連続的に行い，高齢者の生活を基盤とするその人らしさを尊重した看護の在り方と実践を学ぶ。

「聞き書き」は，認知症対応型グループホーム実習において，高齢者１名に対して事前に準備した「聞き書き記録Ⅰ（年表）」（図 1）を活用しながら学生２～３名で行い，語り手（認知症高

聞き書き記録Ⅰ（年表） 学籍番号:　　氏名:

語り手（高齢者）の時代背景	語り手（高齢者）にあった出来事

図１「聞き書き記録Ⅰ（年表）」

（　　）さんの聞き書き記録

学籍番号:　　氏名:

図２「○○さんの聞き書き記録」

齢者）の語りにストーリーを持たせ，「○○さんの聞き書き記録」（図2）として1つの作品にまとめる。学生が行う「聞き書き」の目的は，認知症高齢者の生活史を時代背景と共に理解し，生活の継続性を重視した個別性のあるケアの在り方を学ぶことである。学生は，認知症対応型グループホーム実習の最終日カンファレンス時に，「聞き書き」の気づき・学びを400字以上でまとめた「（課題レポート）グループホーム実習の自己評価表」を発表する。

Ⅴ．研究方法

1．研究デザイン

本研究は，A大学の老年看護学の教員が，老年看護学実習に取り入れている「聞き書き」の効果を評価するために，老年看護学実習にて学生が行った認知症高齢者に対する聞き書き実習のリフレクションレポートを質的帰納的に分析した質的記述的研究である。

2．研究対象者およびデータ収集方法

2017年度老年看護学実習の認知症対応型グループホーム実習において認知症高齢者への「聞き書き」を実施したA大学3年生80名のうち，研究への協力同意が得られた学生に対し，「（課題レポート）グループホーム実習の自己評価表」のメール添付による提出を求めた。

3．分析方法

研究協力の承諾が得られた学生のレポートから「聞き書き」を実施して学んだことが書かれている文章を抽出し，コード化した。コードの内容と抽象度について，レポートを確認しながら研究者間で意見が一致するまで吟味した。コードの同質性・異質性を検討し，類似するものでまとまりを作り，抽象度を高めながらサブカテゴリ化，カテゴリ化を行った。分類およびサブカテゴリ化，カテゴリ化の適切性については，研究者間で意見が一致するまで検討を重ねた。

4．倫理的配慮

対象学生には，実習終了後に文書と口頭にて研究の趣旨を説明し，研究参加・不参加の自由を保証した上で研究協力を求めた。研究協力の有無と成績は一切関係なく，協力を断っても不利益を受けることはないことを説明した。

なお，本研究は島根県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：207）。

Ⅵ．結　　果

80名の学生に依頼し33名から同意が得られた（回収率41.2%）。

分析の結果，246のコードから，46のサブカテゴリ，8のカテゴリが抽出された（表1）。以下，コードを〔　〕，サブカテゴリを『　』，カテゴリを【　】で示す。

【語りを引き出すための事前準備の重要性】は『事前に語り手の生活史や時代背景を捉える』『語り手にとって話しやすい環境を整える』『語りを引き出すスキルをもつ』『語り手を人生の先輩として尊重して関わる』『語り手に関心を寄せる』の5つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔語り手を知りたいと思い，関心を持って接することが基本であり重要〕〔語り手をより理解するためにはその方の生活史に合わせた時代背景を理解しておく〕〔語り手の部屋で行うことは，語り手が話しをしやすい環境である〕等，34のコードがあった。

【語り手の個人史や価値観の理解が深まる】は『語り手の価値観を知ることができる』『表情，話し方，態度，部屋の様子から語り手を知ることができる』『語り手の生活背景を知ることができる』『語り手の個人史を知ることができる』『語り手を多角的に知ることができる』『語り手の人柄や性格を知ることができる』『語り手の感情に気付くことができる』『語り手の価値観は生活史の影響を受けている』の8つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔語り手の大切にしているもの・趣味・生きがいがわかる〕〔生活背景や歴史を知ることで，人物を捉えやすくなる〕〔話しの内容だけでなく，話し方，表情などから語り手の思いなどを伺うことができる〕等，62のコードがあった。

【記憶の想起を助ける工夫の重要性】は『地図

表１　認知症高齢者に対する聞き書きによる看護学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ（コード数）
語りを引き出すための事前準備の重要性	事前に語り手の生活史や時代背景を捉える（17） 語り手にとって話しやすい環境を整える（6） 語りを引き出すスキルをもつ（4） 語り手を人生の先輩として尊重して関わる（4） 語り手に関心を寄せる（3）
語り手の個人史や価値観の理解が深まる	語り手の価値観を知ることができる（15） 表情，話し方，態度，部屋の様子から語り手を知ることができる（13） 語り手の生活背景を知ることができる（11） 語り手の個人史を知ることができる（9） 語り手を多角的に知ることができる（5） 語り手の人柄や性格を知ることができる（4） 語り手の感情に気付くことができる（3） 語り手の価値観は生活史の影響を受けている（2）
記憶の想起を助ける工夫の重要性	地図や写真は記憶の想起につながる（9） 聞き手の対応によって語り手の記憶の想起につながる（2） 選択肢を提示すると語り手は思い出しやすく答えやすい（2） 写真は記憶の想起につながらないこともある（1）
語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿勢の重要性	繰り返される話題は印象に残る大切なエピソードである（18） 聞き書きは語り手のありのままを受け止めることが大切（9） 聞き書きは語り手の思いや気持ちを汲み取ることが大切（7） 聞き書きは語り手のペースで進めることが大切（6） 聞き書きは尋ねることよりも会話をすることが大切（5） 聞き書きは傾聴することが大切（4） 聞き書きは語り手の気持ちに寄り添うことが大切（4） 聞き書きは語り手を承認することが大切（2）
語り手の豊かな感情を呼び起こす	昔の記憶は残っており、聞かれることによって想起される（4） 記憶の想起によって感情の呼び起こしが起こる（4） 語るときの語り手の感情表現は豊かである（3） 語り手は記憶を呼び起こそうと集中している（1）
語ることで人生を振りかえり，過去の記憶や思い出に親しむ	語り手にとって語ることは気持ちの安定につながる（5） 語り手が人生を振り返る機会になる（4） 語り手に回想法のような効果をもたらす（4） 語り手にとって脳が活性化するメリットがある（2） 語り手が時間経過を認識できる（2） 語り手が人とのつながりを実感できる（2） 聞き書きは語り手の人生を意味付け価値あるものにできる（2）
聞き書きは個別性のあるケアを創り出す	認知症者への個別的な関わりを考えるきかっけになる（16） 語り手との今後のコミュニケーションに活かせる（8） 語り手のニーズに即した個別性のあるケアにつながる（5） 語り手の認知機能障害に合わせた対応を考えることができる（4） 聞き書きには知った内容を今後のケアに活かすという目的がある（3） 語り手に必要なケアを理解することができる（2） 語り手との距離が縮まる（1）
聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる	語り手の話を引き出すことや話す内容を捉えることが必要（5） 会話が途切れたときや話を好まない対象者には個別の対応が必要（2） 語りの内容は語り手の体調に気を使う必要がある（2）

や写真は記憶の想起につながる』『聞き手の対応によって語り手の記憶の想起につながる』『選択肢を提示すると語り手は思い出しやすく答えやすい』『写真は記憶の想起につながらないこともある』の４つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔写真や地図などを用いて話すことで，記憶が曖昧な部分を思い出すことが出来る〕〔選択肢を提示して質問すると語り手は思い出しやすい〕等，14 のコードがあった。

【語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿

勢の重要性】は『繰り返される話題は印象に残る大切なエピソードである』『聞き書きは語り手のありのままを受け止めることが大切』『聞き書きは語り手の思いや気持ちを汲み取ることが大切』『聞き書きは語り手のペースで進めることが大切』『聞き書きは尋ねることよりも会話をすることが大切』『聞き書きは傾聴することが大切』『聞き書きは語り手の気持ちに寄り添うことが大切』『聞き書きは語り手を承認することが大切』の8つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔認知症者の語りが特定の内容の反復になってもよいと考えた〕〔何十回でも耳を傾けることが大切である〕〔語り手にとって語るということは，強い思いや大切な思いのあることだと受け止めることが大切〕等，55のコードがあった。

【語り手の豊かな感情を呼び起こす】は『昔の記憶は残っており，聞かれることによって想起される』『記憶の想起によって感情の呼び起こしが起こる』『語るときの語り手の感情表現は豊かである』『語り手は記憶を呼び起こそうと集中している』の4つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔時間が経っても，その時の気持ちは強く残っている〕〔昔の話をしている時の表情はとても豊かで，楽しそうな表情もあれば辛そうな表情もある〕等，12のコードがあった。

【語ることで人生を振りかえり，過去の記憶や思い出に親しむ】は『語り手にとって語ることは気持ちの安定につながる』『語り手が人生を振り返る機会になる』『語り手に回想法のような効果をもたらす』『語り手にとって脳が活性化するメリットがある』『語り手が人とのつながりを実感できる』『語り手が時間経過を認識できる』『聞き書きは語り手の人生を意味付け価値あるものにできる』の7つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔語り手も自分の人生を振り返り，懐かしみ，安堵し，気持ちが安定する〕〔思い出深い話を誰かが関心をもって聞くことで，人生の価値を再発見するような，回想法のような効果が期待できる〕〔思い出深い話を語ることは自分の人生を振り返ることになる〕等，21のコードがあった。

【聞き書きは個別性のあるケアを創り出す】は『認知症者への個別的な関わりを考えるきかっけになる』『語り手との今後のコミュニケーションに活かせる』『語り手のニーズに即した個別性のあるケアにつながる』『語り手の認知機能障害に合わせた対応を考えることができる』『聞き書きには知った内容を今後のケアに活かすという目的がある』『語り手に必要なケアを理解することができる』『語り手との距離が縮まる』の7つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔性格や大切にしている信念はケアに活かすことができる情報になる〕〔ケアや援助でどのような点に気を付けたらいいのかを考えることができる〕〔認知症者への個別的な関わり方を考えるヒントになる〕〔趣味を生かせるような場や他者とのコミュニケーションの場の提供が大切である〕等，39のコードがあった。

【聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる】は『語り手の話を引き出すことや話す内容を捉えることが必要』『会話が途切れたときや話を好まない対象者には個別の対応が必要』『語りの内容は語り手の体調に気を使う必要がある』の3つのサブカテゴリから抽出された。学生の記述には〔話しをする場所や体調にも左右される〕〔会話がとぎれたときには作業に移ることでスムーズに会話をつなぐことができる〕等，9のコードがあった。

Ⅶ. 考　　察

1．「聞き書き」による学生の学び（図3）

佐野らは，学生が実習において高齢者と実際に関わり，その人の尊厳や尊重する関わりの重要性を実感することが，エイジズム（年齢差別）を弱くする経験になる[5]と述べている。【語りを引き出すための事前準備の重要性】と【語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿勢の重要性】から，「聞き書き」実施前の準備や日頃からの高齢者を人生の先輩として尊重した態度で関わることの重要性を学んでいたと考える。認知症高齢者のもつ能力を最大限に発揮できるような援助を考えるためには，認知症看護の基本である相手の自尊心を尊重した関わりが重要[6]と

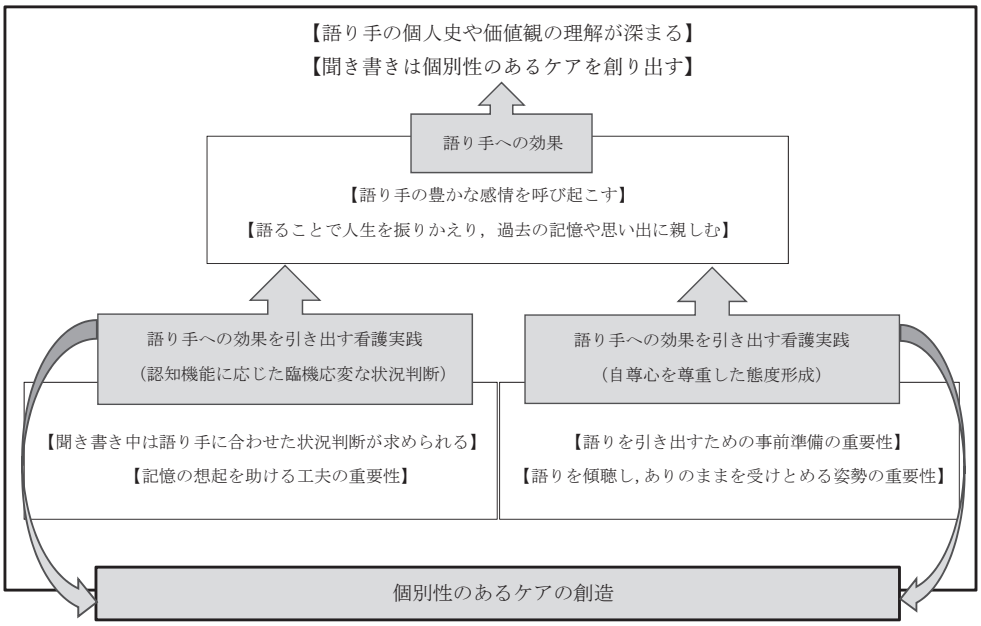

図３　聞き書きによる学生の学び

なってくる。学生は自分が組み立ててきた流れで会話が進まない状況に遭遇し，臨機応変に【聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる】ことや，語り手の認知機能の状況によっては【記憶の想起を助ける工夫の重要性】を学んでいた。状況判断や看護の工夫は認知症高齢者とのコミュニケーションおよび高齢者が残存機能を発揮できるための看護実践そのものであり，認知症高齢者の自尊心を尊重した看護を実践的に学んでいると考える。さらに学生は，関わりを通じて高齢者の反応を読み取りながら高齢者理解を進めていく特徴がある[7]という報告もある。本研究において学生は【語り手の個人史や価値観の理解が深まる】ことを経験していた。このことは，学生がケア提供者として語り手の生活史や個別性に着目して相手を理解し，何が大切かを考え，看護に活かそうと学習を進めていくことで【聞き書きは個別性のあるケアを創り出す】きっかけにもなっていたと考える。学生は，語りの内容だけに注目するのではなく，周囲の環境にも目を向け，語り手を感情豊かな存在と受けとめ，言動や表情から感情を読み取ろうと観察を行いながら「聞き書き」を実施していた。語り手が非言語的に発信している情報も書き起こすことで，「聞き書き」が【語り手の豊かな感情を呼び起こす】ことを実感し，【語ることで人生を振りかえり，過去の記憶や思い出に親しむ】ことを学んでいたと考える。これらのことから，学生は高齢者施設実習の目標である「高齢者の生活史・価値観・健康障害を把握すること」の達成と同時に，認知症高齢者の個別性に着目することができており，「聞き書き」によって，学生の高齢者イメージやエイジズムに変化を与えると考える。

以上のことから，学生は「聞き書き」を通して，認知症高齢者に対する態度形成とQOLを高めるケア提供の機会を得ていたと考える。また，学生は認知症高齢者にとっての効果も実感していることから，「聞き書き」は聞き手と語り手の双方への効果があると考える。「聞き書き」は，学生が認知症高齢者との対話を通して，老年看護学教育において重要な認知症高齢者の理解が深まる機会になることが示唆された。

２．「聞き書き」による学生の学びを促進する教員のサポート

私たち教員は，学生が認知症高齢者の理解や生活史を尊重したケアの在り方を学ぶためには，実習の早い時期から学生が高齢者とコミュニケーションを十分にとれるように，高齢者への理解を促す必要がある。5週間の老年看護学実習の前半に行う「聞き書き」は，「患者の目線

で話す」「挨拶をきちんとする」等の基本的コミュニケーション技術に加えて認知機能に応じた工夫を取り入れながら，より実践的な認知症高齢者とのコミュニケーションの場を提供していた。伊藤らは，拒否行動・混乱状態にある患者を受け持った看護学生のかかわりを分析すると，「会話の内容の記録を促すこと」で，学生は患者の言動には患者なりの理由があることを言語的に探り，「誠実性」「傾聴」「側に存在すること」を経験的に学んだ[8]と述べている。本研究における経験を通した学びとして，【語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿勢の重要性】と【聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる】のカテゴリが抽出された。このことは，老年看護学で学習する認知症高齢者がもつコミュニケーション障害を考えると，『会話が途切れたときや話を好まない対象者には個別の対応が必要』のように，学生自らが相手に応じて瞬時に状況判断を行って工夫し，認知症高齢者との関係作りに取り組めていたと考える。また，『聞き書きは傾聴することが大切』『聞き書きは語り手の気持ちに寄り添うことが大切』のように，「聞き書き」を通して認知症高齢者に対する看護を実践していたと考える。

看護とは，対象を理解していく過程であると同時に，対象との相互行為により発展するため，実習やインタビューという手段を用いた学生と高齢者の直接的な相互行為が，どのように高齢者理解に影響しているのかを分析することは，非常に重要[9]である。教員は，学生個々が「聞き書き」という相互行為を通して体験した内容，感情，思考などを言語化したものから，学生が認知症高齢者理解を深めていく過程を確認していくことが重要である。今後もカンファレンス等の振り返りの際には，「聞き書き」を通して学生が得た学びをフィードバックしていくことが重要である。

Ⅷ. 結　　論

今回，看護学生が実施している認知症高齢者への「聞き書き」の学びを明らかにし，実習効果を検証することを目的に分析を行った。その結果，【語り手の個人史や価値観の理解が深まる】【聞き書きは個別性のあるケアを創り出す】【語り手の豊かな感情を呼び起こす】【語ることで人生を振りかえり，過去の記憶や思い出に親しむ】【語りを引き出すための事前準備の重要性】【語りを傾聴し，ありのままを受けとめる姿勢の重要性】【記憶の想起を助ける工夫の重要性】【聞き書き中は語り手に合わせた状況判断が求められる】の８つのカテゴリが抽出された。「聞き書き」は，学生が認知症高齢者との対話を通して，老年看護学教育において重要な認知症高齢者の理解が深まる機会になることが示唆された。教員は，今後も学生個々が「聞き書き」という相互行為を通して体験した内容，感情，思考などを言語化したものから，学生が認知症高齢者理解を深めていく過程を確認していくことは重要である。

謝　　辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に，心より感謝申し上げます。

利益相反

本研究における利益相反はない。

文　　献

１）正木治恵他．老年看護学概論．2013；東京：南江堂．
２）山田律子．生活機能からみた老年看護過程，看護教育．2010；51（10）：850-854.
３）小泉美佐子，伊藤まゆみ，宮本美佐．老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果．老年看護学．2000；15（1）：140-146.
４）駒谷なつみ，大津美香，木浪麻里，他．高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと．保健科学研究．2017；8（1）：33-40.
５）佐野望，檜原登志子，赤坂寛子．看護学生の高齢者の知識と看護の学びによるエイジズムの関連―高齢者看護学実習Ⅰの学習

効果―．共立女子短期大学看護学科紀要，2010；5：7-16.
6）増田由実子，西片久美子．学生が学んだ「自尊心を大切にする関わり」―高齢認知症患者のケアを通して―．日本赤十字看護学会誌，2009；9：42-48.
7）谷本真理子，鳥田美紀代，田所良之他．老人ケア施設実習のおける高齢者理解のための方法としてのナラティブ面接の意義．千葉大学看護学部紀要，2019；31：27-31.
8）伊藤道子，鳴海喜代子．拒否行動・混乱状態にある患者を受け持った看護学生の関わりの分析―教育的サポートの考察―．日本看護学会論文集，老年看護，2003；33：208-210.
9）樋口友紀，福島昌子，竹渕由恵，他．看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向―2002 年～ 2011 年に発表された国内研究に焦点を当てて―．群馬県立県民健康科学大学紀要，2013；8：89-101.

Learning of Nursing Students Through Interviews with Elderly People with Dementia

Saori ARAKI[1], Tomoko ITO[1], Sayuri KATO[1], Kenji HAYASHI[1], Yuka HAMAMURA[2], Miyuki KAJITANI[1]

Key Words and Phrases：learning of nursing students, interviews, elderly people with dementia

[1]The University of Shimane
[2]Former The University of Shimane